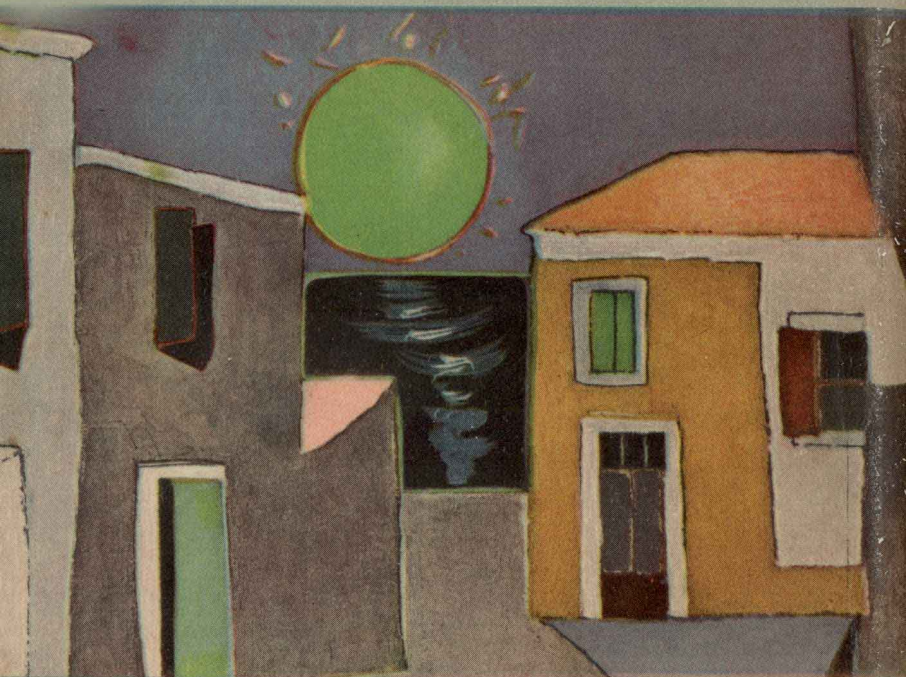


*Albert Camus*



*L'Etranger · La Peste*

# 異邦人・ペスト

アルベール・カミュ

窪田啓作 譯  
宮崎嶺雄

現代世界文學全集

22

新潮社版

# 現代世界文學全集 22

異邦人・ペスト

L' ETRANGER  
LA PESTE  
by  
Albert Camus

Originally Copyrighted by Librairie Gallimard, Paris.  
This book published in Japan by arrangement with Léon Prou.

昭和二十七年十一月十一日 印刷  
昭和二十七年十一月十五日 發行

定價 參百圓

地方  
賣價 參百拾圓

譯者

窪田 啓雄  
宮崎 嶺

發行者

東京都新宿區矢來町七一  
佐藤 義夫

發行所

東京都新宿區矢來町七一  
新潮 社

電話九段(33)二一二五番  
振替東京八〇八番

亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

東日本印刷株式會社  
Printed in Japan

## 解 説

### 一、カミュの人と作品

アルベール・カミュ (Albert Camus, 1913—) は今度の大戦中に初めて現れたまづたくの新人であるが、僅か數年にして早くも世界的な聲價を擔ふ作家となり、今やその作品は一作毎に世界の視聽を聚めつつあると云つても過言でない。戦後フランス文學に於ける最大の存在はジャン・ポール・サルトルであるが、現在既にこの先輩をさへ壓するかに見えるカミュの聲望は、いつたい何處から來るのであらうか。思ふに、サルトルの極めて幅の廣い作家活動が屢々誤解とスキャンダルを喚び起し、フランス社會の良識に根強い反撥を感じさせるのに反して、カミュの誠實にして清潔な文體と眞面目な人柄が廣く信頼感を以て迎へられるといふことも、一つの理由であらう。しかし、サルトルが文學者よりも寧ろ哲學者であり、文學的にやや異質雜駁なものを感じさせるのに對して、青年時代から十分な文學的修練を積んだカミュの文體が、ジイドを通じて象徴派を繼承しつつフランス古典の傳統につながつてゐることが、フランス文學の主流を代表する作家として、今後の彼に大きな期待を懷かせる有力な理由となつてゐるものと思はれ

る。事實、その彫琢された明晰な文體は一部に新古典派とさへ稱せられるほどであり、その作家的位置は、ジイド、マルロオに次いで、既に次代の指導者たることが期待されてゐる。彼の名聲が急速に世界的なものとなつたことは偶然ではない。

カミュは一九一三年十一月七日、佛領アルジェリアのコンスタンチヌ縣モンドヴィ (Mondovì) に生れた。モンドヴィはチュニスとの縣境に近く殆ど地中海岸に位する、人口五六千の小邑で、煙草と葡萄の産がある。母はスペイン系の婦人、父はアルザス出身のフランス人で、出稼ぎの勞働者であつたといふ。勞働者の家庭で、しかもその父が彼の生れた翌年に早くも世を去つたのであるから、彼が幼時から母の手一つに育てられて、具さに貧窮の苦しみを味つたであらうことは想像に難くない。この母の佛は、恐らく『ベスト』に於けるリウーの母のうちに見出されるのであらうが、プチ・ブル出身の作家が殆ど大部分を占めるフランス文壇にあつて、カミュのこの出身は重大な特異性をなすものと云へよう。或るコムニニストが、「あなたは自由といふものをマルクスのなかで學ばなかつた」と非難したのに答へて、「いかにもその通りだ。私はそれを貧窮のなかで學んだのだ」と、カミュは答へてゐる。彼の作品には、高貴さはあつても貴族趣味はなく、民衆の善良な、無邪氣な生活に對して、常に溫かい共感が示されてゐることは、この出身が彼の文學に齎した大きな特質である。

さういふ彼が、どんな風にして高等學校を卒へることができたかは知られてゐないが、やがてアルジェ市の國立大學文學部に給費生として入學を許され、土地の新聞社の仕事などで學資を補ひながら哲學を專攻して、一九三六年これを卒業した。そして、學資の關係からか、哲學教授の資格をとることは斷念し、直ちに職を求めて、自動車部分品販賣人、船舶仲買人、市廳吏員、測候所員等、後に彼の作品に屢々登場するさまさまの職業を轉々としつつ、爾來、

文學と演劇のなかにその天職を見出さうと努めた。

一九三五年、既に在學中から、彼を中心にして「勞働座」といふアマチュア劇團が作られ、時をりラジオ放送などにも出演してゐたが、カミュは一座を率ゐて演出、脚色に當ると同時に、自ら舞臺にも主演し、異常な熱意を以てこの演劇活動を續けて行つた。そして一九三八年、フランス本國を初め中南歐への短い旅行から歸ると、新たに「同志座」といふ劇團を組織して、その主宰者となつたが、同年末この一座が解散されるまでの四年間、舞臺に於けるカミュの熱演ぶりには座員も觀客もひとしく壓倒されたと傳へられ、演劇に對する彼の情熱が、當時から既に並々ならぬものであつたことが窺はれる。後年發表された大作『カリギュラ』は、實は一九三八年、この劇團の解散直後に書かれたものであるといふ。

この演劇への情熱は、以來少しも衰へず、やがて『異邦人』によつて小説家としての名聲を得た後にも、寧ろ小説に勝る熱意を戯曲に注がせてゐるのであるが、これは、生命の充溢感を強烈直截に解放させる演劇の特質が、彼の生來の資質に最も適切な満足と與へるためであると思はれる。そしてこのことは、彼の育つたアフリカ海岸の熱烈な風土と深い關係があり、彼の最初の文學的試みとして書かれた數篇のエッセイは、何よりも力強くそれを語つてゐる。これらのエッセイは、大學卒業の年からその翌年にかけて書かれ、やがて『裏と表』(L'Envers et l'Endroit)及び『結婚』(Mariage)と題する小冊子となつて、それぞれ一九三七年及び三八年に出版された。前者は現在絶版となつてゐて、その内容を知り得ないが、『結婚』は、そこに彼の思想と才能の萌芽が悉く見出されるといふ意味からばかりではなく、彼の特異な精神的風土がそこに最も鮮明に描き出されてゐる點で、カミュを理解する上に極めて重要な作品である。

「われわれ地中海人は」と、この若々しいエッセイのなかで彼みづから云つてゐるやうに、彼の文學は、在來のフラ

ソス文學のキリスト教的なものから全く脱出した、異教の、古代ギリシアの、熱と光と芳香の風土から生れた文學である。燦々たる太陽、海の永劫の波音、無人の沙漠の涯しない曠がり、花と果實と大地の噓せかへる芳香は、彼にとつてさながら生命そのもののイメージであり、彼が生を思ふ度毎に、彼の作品はそれらの光と音と香の輝かしい反響で満たされるのである。カミュの「不條理の哲學」は、この輝かしい風土のなから生れた。「生へと誘ふ國で死ぬことの厭はしさを、あらゆるものが呼吸している」この國で、彼もまた死の厭はしさに戦かねばならなかつた。永遠と絶對を求める人間精神と、すべてが死に歸着するこの世界との間には、ただ不條理な關係しかあり得ない。この不條理から生ずる意識の不安を克服するために、さまざまの哲學と宗教は、形而上學的な世界解釋、或は神への信仰を説き、要するに死のなかに慰めを見出さうとして、死を美化したのであつた。しかし、この生命の生氣溢れる國で育つたカミュにとつては、死は斷じて美しいものではあり得なかつた。彼は斷乎として、神と永生を拒否し、それに代るものとして、この世界との「結婚」を提唱する。即ち、自己が自身にとつても全く「異邦人」に見えらるほど、肉體的に自然と合一し、世界に於ける「存在」としての感覺のみを意識するとき、われわれは「不條理」の不安から解放され得るといふのが、『結婚』の試論の要旨である。この青年期の思想は、やがて更に發展して、飽くまで死を拒否し、不斷に死との闘争を續けることのなかに、刻々の生の歡喜と充溢を見出さうとする『シジフォスの神話』の發見にまで生長するのであるが、彼の思想の根源には、アルジェリアの芳醇な自然と、地中海人の異教精神とが、力強く生きてゐるのである。

轉々と職の定まらなかつたカミュも、一九三八年、アルジェ市の地方新聞の記者となつて漸く安定した地位を見出し、しかもこの職業に意外な才能を示して注目を惹いた。この年から翌年にかけて、彼は二つの事件に有能なジャーナリストとして、頭角を顯はしたのであつた。その一つは、アルジェリアに於けるカビル族の生活狀態を調査して、

その悲惨な實狀に驚き、公憤に満ちた報告記事の力によつて遂に總督府を動かし、これに救済の手を伸べさせたことである。もう一つは、新聞記者として或る死刑宣告の場面に立會つた際、死刑の非人間性を痛感し、死刑廢止の論說を掲げて當局と闘ひ、遂にその被告を救ふことに成功したといふ事件で、これは死の問題に關する彼の思想に深い影響を與へた重大な經驗であり、名作『異邦人』は恐らくこの時の經驗を直接の素材としたものと思はれる。

かうして地方新聞で認められた結果であらうが、彼は遂に中央のジャーナリズムに進出する機會を恵まれ、一九四〇年、パリの夕刊紙「パリ・ソワール」の記者となつてパリへ出た。然るにこの年六月、フランスは忽ちドイツ軍の蹂躪するところとなり、カミュもまた多くの文化人と行動を共にして、再びアルジェリアに逃れねばならなかつた。彼は今度はオラン市に居を定め、或る私立學校に教鞭をとりながら、同志と共に「自由フランス」のための闘ひを闘つてゐたのであるが、この期間はまだ、彼の作家的生長にとつて、最も意義深い修練の時期であつた。ドイツ軍のフランス侵入と同時に、アンドレ・ジイドを初め、多くの優秀な知的指導者が海を渡つてアルジェリアに逃れて來たことは、この植民地の若い作家たちを大いに刺激して、活潑な文學活動の機運を促し、やがて戦後には、カミュ以外にも數名の注目すべき作家を生む素地を作つた。カミュも、ジイドを中心として集つた若いグループの一人であつたが、この新たな刺戟のなかで、彼の文學的意欲は大いに磨かれ、二年の後、一九四二年秋、「作家全國委員會」の一員としてレジスタンス運動のためパリに潜入した時、彼は既にその最初の小説『異邦人』(L'Étranger)と代表的エッセイ『シジフォスの神話』(Le Mythe de Sisyphe)とを書きあげてゐた。

この二作は同年直ちにパリのガリマル書店から刊行されたが、特に『異邦人』は「獨軍占領以來最良の書」として諸家の一致した賞讃を博し、更にサルトルがこれに克明な論評を加へるに及んで、無名の新人カミュは一躍最も注目すべき作家となつた。この作品については別に後述するので、ここでは詳しく觸れないが、この書の實質的な解説

ともいふべき『シジフォスの神話』やサルトルの論評が現れる以前に既に好評を博してゐたらしいことから見て、そのテーマよりは寧ろその手法と文體の嶄新さが、人々を驚かしたのであることだけは、云つておく必要があらう。『シジフォスの神話』は、著者みづから、これは「人生の不條理」の感覺といふ精神の一つの病患をその純粹狀態に於て描寫し、これを結論としてではなく一つの出發點として示さうとするものであり、差當りなんらの形而上學も信仰もここには含まれてゐない、と斷つてゐる通り、そこからいかなる立場が導かれるかはなほ今後探求すべき問題として殘されてゐるが、しかしこれがカミュの思想の核心を最も體系的に述べたものであることは、議論の餘地がない。彼は先づ人生の不條理を簡潔に論證し、これに對するハイデッガー、ヤスバース、シェストフ、キェルケゴール、フッサール等の實存主義哲學者たちの説を検討し、これらの思想家たちがいづれも人生の不條理を認めることに同意しながら、最後の瞬間に一種の飛躍を行つて、或は形而上學的な説明に、或は原始キリスト教的な神祕主義に逃避してゐることを非難する。これは彼等が、人生に希望をもちたいといふ欲求に負けて人間精神の尊嚴を裏切つたものであり、かういふ希望の幻影に惑はされることなく、人生の不條理を明瞭に意識しながら、しかも絶望することなく刻々を生きるこそ、不條理の人生を生きる價值あるものたらしめる唯一の道であると、彼は主張する。そして、ギリシア神話に記された、夜見の國で絶えず轉落する大岩を丘の上に押しあげる仕事を永劫に繰返してゐるといふシジフォス王の話は、そのままわれわれの人生のシンボルであるが、しかしシジフォスはその無限の敗北の努力のなかに、刻々の歡喜と幸福とを見出し得るといふのが、カミュの信條である。但し、この「死に對する不斷の反抗」といふ思想は、『異邦人』ではまだ明確にされず、五年後の『ペスト』に於て初めて完全な文學的表現を得るのである。

なほ、彼の「不條理」の思想に關聯して、特に『異邦人』『誤解』等の初期の作品の傾向から、彼もまたサルトル

ら實存主義作家のグループに屬するものと見られてゐたのであるが、カミュは當初からこれをはつきり否定してゐる。確かに『シジフォスの神話』は實存主義思想家たちを明瞭に批判してをり、その限りではサルトル一派から明確に區別されねばならぬが、しかし本質に對して實存を優位に置くといふ點で、彼の立場は、廣い意味に於ける實存主義哲學の系列に屬するものと、一般に解釋されてゐるやうである。

一九四四年の初め、ドイツの敗北が近づき、レジスタンスの運動が益々熾烈さを加へつつあつた時、獨軍占領下のパリでカミュの最初の戯曲『誤解』(Le Malentendu)が初演された。これは『異邦人』の主人公ムルソーが獨房内の古新聞で偶然に讀む三面記事をもつ素材としたもので、陰鬱な中歐の町で、海の彼方の熱い太陽と豊かな幸福に憧れる宿屋の娘が、いつかその夢を實現する手段として、泊り客を殺して所持金を奪ふことを習ひとしてゐるうちに、或る日、二十年前の家出から歸つて來た兄をそれと知らずに殺害し、絶望の極、母親と共に自殺するといふ、暗い悲劇の物語である。カミュはこの三面記事的な事件を見事に變貌させて、人生の不條理との闘ひを、この世界からの脱出によつて解決しようとする者の情熱と、その敗北、といふ哲學的な主題にまで高めることに成功し、殆ど裸の思想が語つてゐるやうな壓縮された文體は、古典悲劇の簡素さに達してゐる。暗澹たる絶望の支配する暗い芝居であるが、マルタの脱出の願望と拒否の情熱は、さながら強烈な輝きのやうに舞臺を照し出し、獨軍哨戒機の低空飛行の爆音のため、腰を中斷しなければならなかつたといふ、當時のパリの息づまるやうな劇場で、この力強い解放の叫びが、どんなに深い共感を以て迎へられたかは、想像に難くない。アンドレ・ルツォはこの作品の力強さを評して、カミュの書いた最も完璧な作品と云つてゐる。

この年の八月二十一日、パリ解放のために騒起した市民軍の銃聲が轟いてゐるなかで、ヴィシー政府と獨軍に禁壓されてゐた諸新聞が一齊に解放のスタートを切つた。そのなかには占領下に發行を中止してゐた古くからの大新聞に

まじつて、レジスタンスから生れた「國民戦線」「闘争」等の新鋭紙もあり、カミュはこの日から「闘争」紙の主筆に推されて、以來三年餘り、勝れぬ健康に鞭打ちつつ、終始文學者の誠實を貫いた時事論說を以て同紙を率ゐ、新たな有力紙を作りあげた。一九五〇年に刊行された『時事論集』(Actualités) (譯題『自由の證人』)は、この論說の全部と同時期に於ける他の時事論評論數篇を收録したものであり、現實の具體的な問題と血みどろな格闘を續ける文學者の誠實な精神が端的に表現されてゐる點で、行動の人カミュを知るためには必讀の書である。

しかし、恐らくそれに劣らぬ重要性をもつてゐるのは、解放の翌年發表された『或るドイツ人の友への手紙』(Lettres à un Ami Allemand)であらう。これは、同じレジスタンス紙の『自由評論』『解放手帖』等に發表された四つの論文から成り、ドイツ生れの友人に宛てた手紙の形式で、「レジスタンスの原理」ともいふべきものを力強く論證しつつ、同時にカミュの思想に大きな生長を齎した一つの發見が、そこに語られてゐる。彼はこの手紙に於て、現在ナチ黨員となつてゐる營ての友が、彼と同じ「不條理」の認識に立ちながら、輕率な絶望に奔り、天上の神と闘ふことをやめて、地上の事物と精神との破壊を任務とするに至つたことを烈しく非難し、要するにそれは「不正を擇び、神に與した」ものであり、反對に彼自身は「大地に忠實を守るために正義を擇んだのだ」と宣言する。そして彼は附け加へる——「僕は依然として、この世界はより高次の意味などとはもつてゐないと信じてゐる。しかし、この世界には意味をもつてゐる何ものかがあることを僕は知つてゐる。それは人間といふものだ。なぜなら、人間こそは意味をもつことを要求する唯一の存在だからだ」。一九四二年から二年間、抵抗團體「闘争」の一員として、レジスタンスのさなかに、彼が身を以て學んだのは、この人間のための正義といふことであつた。

「現代作家の叛逆」の著者アルベールは、カミュに深く傾倒してゐる人らしいが、カミュの現在までの作品を三期に分つことができるとしてゐる。第一は『結婚』及び『異邦人』を含む「アルジュリア期」で、これは官能的な非倫

理の時代である。第二は『シジフォスの神話』『カリギュラ』『誤解』の時期で、これは「哲學期」と呼んでいい。第三期は即ち「倫理期」で、『ベスト』以後の作品がこれに屬する。そして第一期から二期への變貌を齎したものは、獨軍占領下の窒息的な空氣であるが、第二期から三期への生長を促したものは、レジスタンスに於ける連帶性の體驗であり、「叛逆」の問題が個人的なものから集團的なものに移ることによつて、個人的な満足や情熱とは別種の、共同の理想を追ふといふ倫理の立場が初めて發見されたのであると、アルベールは説明する。事實、『ベスト』に於てカミュを大きく生長させてゐるものは、この連帶性の倫理であり、レジスタンス及びその後の政治的實踐が、彼にとつていかに重要な意味をもつてゐたかを知ることができる。

戦争の終結と共に、先づ華かな活動を示したのはパリの劇壇であつて、アヌイ、サルトル、ジロドゥー、ボーヴォワール等の秀作が續々上演されたが、これらと並んで一九四五年から翌年にかけてカミュの『カリギュラ』(Caligula)がエベルト座に初演された。ローマの暴帝カリグラを主人公とするこの悲劇は、この怪物的な人物を、人間の條件を凝視する一個のモラリストに仕立て、人生の不條理に目覺めたものが、人間に與へられた可能のなかで闘はうとせず、人間を超えた不可能の世界を求めて、自ら神たらんとしたための悲劇的な結末を描いてゐる。不條理の問題をその極限まで取扱つた劇として、思想的には深いものをもち、見事な文體にも缺けてゐないが、カリグラに對立するものの力が十分に表現されてゐないために、深刻なテーマが屢々カリグラの哲學的獨白に終り、主人公の絶望の深さに於ては『誤解』を遙かに凌ぎながら、感銘の深さはこれに及ばない。一般の世評も餘り芳しくなかつたやうで、アンリ・トロワイヤが「實存主義理論の解説に過ぎぬ觀念劇」ときめつけたのに對して、カミュは彼の立場が實存主義とは異なることを擧げて反駁してゐる。

彼の代表作『ベスト』(La peste)が發表されたのは、それから一年後の一九四七年である。これは彼の代表作で

あるばかりでなく、戦後フランスの代表作の一つであり、この一作によつて彼の名聲は世界的なものとなつた。このやや難解な小説がこれほど廣汎な讀者をもち得たのは、戦争の體驗によつて、人々が既に多少とも「不條理」の意識を各自のうちに宿してゐたからであり、そこにカミュの文學の深い時代的意義が存するのであるが、この作品については、あとで別に詳説することにした。

その翌年發表された戯曲『戒嚴令』(L'État de Siège)にはベストの王が主要人物として登場するが、しかしこれは小説『ベスト』の戯曲化ではなく、ベスト傳説を現代化しつつ、全體主義の非人間性と、これに對する闘争とを、殆ど戲畫化に近い簡勁さで描いたものである。ジャン・ルイ・バロオの腹案に基いたといふこのスペクタクル風の作品は、舞臺的な部分にかなりバロオの協力があつたことと思はれるが、ギリシア悲劇風なコーラスを豊富に驅使し、抒情的な獨白から群衆劇に至るあらゆる段階の演劇的表現を取入れようと試みてをり、その準備と演出のためには嘗てない苦心をしたらしいが、その意圖が餘りにも前衛的であつたため、一般の觀衆には甚だ不評であつたやうである。確かに演劇的には批判の餘地があらうが、しかし全體主義の愚劣さ、醜惡さをこれほど鮮明に描き得た作品は稀であらう。

續いて一九四九年、カミュは更に一篇の戯曲を書き、この新作『正義の人々』(Les Justes)はエベルト劇場に上演された。これは一九〇五年、ロシア虛無黨員のセルゲイ太公暗殺事件に材を採り、カリアエフなる實在の人物を主人公として、「正義と殺戮」及び「愛と共同の死」の問題を取扱つたもので、カミュの劇として初めてのロング・ランを記録したといふ。彼の戯曲としては、前三作に較べて、在來の心理劇の手法に著しく近づいた感じを與へるが、その思想と表現の深化には、小説に於ける『異邦人』から『ベスト』へのそれに對應する生長が感じられる。

一昨年の末刊行された『時事論集』については既に述べたが、續いて昨年末には評論『叛逆した人間』(L'Homme

Revolté, 1951) (譯題『反抗的人間』) が發表された。これは既に四年來豫告されて周到に準備された力作であつて、「不條理」に叛逆した人間の姿を過去の歴史のなかに跡づけつつ、現代の政治と新しい人間像の問題にまで及んでゐる。前著『シジフオスの神話』の思想の具體的適用、その大きな發展として、彼の論文中最も重要な位置を占めるべき作品である。

一九四八年末、健康上の理由で「鬭争」紙を退いてから、カミュはガリマール書店の「希望叢書」の監修者となり、同書店内に一室を與へられて、獨自の構想に基づくその叢書を着々實現中である。實存主義哲學の形而上的世界への飛躍をも、キリスト教の神の救ひをも拒否すると同時に、またコンミュニズムの徹底的合理主義とも鋭く對立する彼の主張は、「キリスト教かコンミュニズムか」の切迫した對立に激動するフランスの思想界にあつて、多くの知識青年に一人の誠實な指導者を感じとらせるのであらう。彼の部屋には、戦後の悩み多い青年たちが、彼等の氣持を最もよく理解してくれる人を慕つて、各自さまざまな問題について教へを乞ふために、ひつきりなしに詰めかけてゐるといふ。彼はまた四十歳前の若きであり、自ら云ふ如くまだ「探し求めてゐる」作家であつて、現在の聲望にも拘らず、寧ろ今後にこそ期待すべきものが多いと思はれる。不幸にして胸の痼疾に悩みながらも、目下、小説の大作を準備中であると聞が、近著『叛逆した人間』の發展が、その新作にいかにか具象化されるか、フランスの讀書界と共に、われわれもまた刮目して待つところである。

## 二、『異邦人』について

『異邦人』について、近來稀に見る眞面目な文學的論争が、廣津和郎氏と中村光夫氏の間に展開されたことは、讀者

の記憶にまた新しいことであらう。この論争が、『異邦人』の問題點を交互に解明しつつ、この虚構の物語の見事な眞實性を感じさせることによつて、豫想外に廣い讀者の注意をこの作品に惹きつけたことは、日本の文學界にとつても極めて意義深いことであつたが、それに關聯して、カミュ自身のこの作品に對する説明を聞き得たことは、思ひがけぬ收穫であつた。しかもこの説明（昭和二十七年一月十五日、朝日新聞朝刊「カミュ會見記」）はまことに平易懇切なもので、これとサルトルの『異邦人』解説を併せ讀めば、殆ど蛇足を加へる餘地はないからである。

カミュは、作家には珍らしい淡泊さで、先づこの作品の構造と意圖とを明らかにしてゐる――

「私は『異邦人』を二部に分ち、その第一部ではサルトルの見地を書き、第二部では全然同じ行爲に對する社會の見地を書き、最後でそれらを一つの悲劇まで持ちこんで行つたわけです。この作で私の言はうとしたことは、うそを言つてはいけない、自由人はまづ自分に對して正直でなければならぬ。しかし眞實への奉仕は危険な奉仕であり、時には死を賭した奉仕であるといふことです」

ここに云はれてゐる「サルトルの見地」とは、即ち人生の不條理を明瞭に意識してゐる人間、カミュの所謂「不條理人」の見地であつて、このやうに第一部の事件がすべて「不條理人」の眼を通して語られてゐるところに、この作品の獨創性が存するのである。サルトルも云つてゐるやうに、若し單に「不條理」をテーマとしただけの小説を書くためなら、例へば善良平凡な一市民が、或る朝突然人生の不條理に目覺め、以後その行動が一變するといふ風にでも書けば、讀者はその主人公の心理を辿りつつ、もつと容易にこれを理解することができたであらう。しかしカミュの意圖したものは、「不條理」の理解ではなく「不條理」の感覺を讀者に與へることであり、そのためには、説明を抜きにして、先づ直接に讀者を「不條理」の世界に接觸させる必要があつた。サルトルの「不條理人」の眼は、人生に普遍的な意味を認めないのであるから、決して説明といふことをしない。彼はただ叙述するだけである。かうして、

全く意味を奪はれた一つの世界が、宛かもガラス戸を隔てて人々の動作だけを見てゐるやうな異様さで、鮮かに感知され、讀者は否應なしに「不條理」の世界を感覺させられるのである。

しかし、カミュは初めからムルソーを「不條理人」として、讀者に押しつけてゐるわけではない。できるだけあり得べき人間の感じをこの主人公に與へるために、「わざと輪廓をぼかし」て、「不條理人」的な明晰な意識、自己への誠實さを、生來嘘のつけない、そして世間的な利害に無關心な男、といふかたちに緩和して描いてゐる。ムルソーは「一つの社會の常識ないし主觀に従ふ必要を自分に感じない」し、また「自分の感じた以外のことは言ひもせず、やりもしない」が、しかしそれは社會の常識に對する拒否といふよりも寧ろそれへの無關心であり、誠實への努力といふよりも寧ろ虛榮心の缺如である。このことは、彼がバリ轉任の話になんの反應も示さなかつた一事に、また、母を養老院に入れたため近所で惡く云はれてゐることに全く氣がつかないでゐたといふ事實に、最も明瞭に表れてゐる。彼がはつきり意識した「不條理人」となるのは、牢獄に入つてから、彼の刻々のささやかな欲望が獄舎の壁のなかに閉ぢ籠められてしまつてからであり、そしてその時、死刑執行といふものが「人間にとつて眞に興味ある唯一の」問題であることを、彼は悟るのである。

人生に普遍的な意味を感じ得ない「不條理人」は、未來といふものに意味を認めることができず、絶えず現在の瞬間に生き、そこに刻々の満足を求めるだけである。他人といふものはあつても、それは自分が現在相對してゐる人間たる限りに於てであつて、その場にゐない人間は存在しないも同然であり、従つて社會もその連帶性も存在しない。このことは必然に、彼を官能主義と無道德主義に導く。ムルソーが、トラックに跳び乗るために同僚と駆けつこをするほど活氣に満ちた青年でありながら、まるで口癖のやうに「それはどうでもいいことだ」と繰返すのは、そのためである。彼にとつて、彼が眞に欲望を感じないことは、すべてどうでもいいことである。彼がレエモンのやうないか

がはい男のためにあんな手紙の代筆をしたことを不審に思ふ讀者もあらうが、彼はただ、眼の前にあるレエモンに満足と與へる快さに従つたまでである。また彼が、マリイを「愛する」とは云はず、ただ彼女に對する欲望だけに安んじてゐるのも、同じ理由による。この點を明らかにするのは、『ジジフォスの神話』の次のやうな言葉である——

「愛といふものについては、私は、自分をその或る人間に結びつけるところの、欲望と優しさと理解の混合物を知つてゐるだけだ」「われわれが、或る人間にわれわれを結びつけるものを、愛と呼ぶのは、ただ、集合的にものを見る見方に基づいてさうするだけであり、この見方については書物や傳説に責任がある」。ムルソーは、「愛」といふ言葉に含まれるこの持續の觀念を拒否する。マリイに對する、また母に對する愛が、約束によつて、習慣によつて、虚偽の姿をとらされることを拒むのである。

ムルソーが官能の人間であることは、彼の「不運な」殺人事件を理解する上に重要である。彼があゝの岩陰に近づいた時、前後を熱砂と烈日に挟撃されて、ただその泉のほとりに辿りつくことだけが残された唯一の血路だつた様子は、息づまる迫眞性を以て描かれてをり、彼がまつたく無意識のうちにピストルの引金を引いてしまつた事情は、何びとも納得され得るであらう。しかし、最初の一發ののち、しばらく間を置いて、連射された四發の銃聲は、何を意味したか？ 辯護士もこれを辯護し得なかつたし、ムルソー自身もその理由を説明できなかつた。「乾いた、それでゐて、耳を聳する轟音と共に、すべてが始つたのは、このときだつた。私は汗と太陽とをふり拂つた。晝間の均衡と、私がそこに幸福を感じてゐた、その濱邊の稀しい沈黙とを、うち毀したことを悟つた。そこで、私はこの身動きしない體に、なほ四たび撃ちこんだ」——この日一日、太陽と砂とに痛めつけられてゐた官能が、この灼熱の均衡と沈黙とを遂に破壊し得たと感じた時、彼のうちに一時に爆發したのである。それは官能の爆發的な満足であり、彼にとつて、その一彈一彈が、焼けつく太陽から解放される快感の高鳴りであつたに違ひない。官能の満足のために死體